

研究報告

配偶者を亡くした経験をもつ高齢者のスピリチュアリティ尺度

— (Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement

who have Lost their Spouse) 開発の試み—

生田奈美可¹⁾ 佐藤美幸¹⁾ 清水佑子¹⁾

¹⁾ 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

キーワード；高齢者，スピリチュアリティ，尺度開発，配偶者喪失，死別

I はじめに

我が国の高齢者数は増加し続けており，超高齢社会を迎えようとしている．国民衛生の動向 2015/2016¹⁾によると，男性の平均寿命は 80.50 歳，女性の平均寿命は 86.83 歳であり，65 歳以上の老年人口の占める割合は 26.0%と増加の一途をたどるとともに，高齢者の独居世帯が年々増加している．高齢期の特徴としてエリクソン²⁾は，ライフサイクルの中で自己をバランスよく捉える必要性と，身体的機能の減退，社会的役割からの引退といった喪失の経験から見出された高齢期の人々の有限性の自覚について述べている．すなわち高齢期では，限られた自らの命を捉えながら，個人としての「わたし」という感覚について，過去の喪失体験を含めた今までの人生と，自分とのバランスをうまく統合することが必要になる．

スピリチュアリティ^{註1)}は，人生の困難や苦悩といった危機状況に直面しながらも，生きるための支えとなる基盤として，生きる意味や枠組みを再発見する機能である³⁾．しかし，医療界におけるスピリチュアリティに関する研究自体が，我が国においてはまだ歴史が浅く，文化的依存性に基づいた概念についての考察には至っていない．そうした中でスピリチュアリティは，1998 年の WHO の健康の定義改正議論に，spiritual という概念が検討されたことを機に，人々の健康を考える上での重要な概念として認識されるようになり⁴⁾，現在では身体的，精神的，社会的側面と同様，人間の QOL を規定する側面として，不可欠な概念であることが言われている⁵⁾．また青木⁶⁾は，スピリチュアルケアは，精神的ケアとは別のものであり，実存的で，宗教的，主観的な本人の生き方と密接して

いるとし，高齢者のスピリチュアルケアについて，個人のスピリチュアリティを把握しながら介入することが必要であると述べる．すなわち，スピリチュアルケアは，精神的ケアとは別の介入であり，喪失を多く経験し，危機的な状況にある高齢者にとって精神的ケアが必要であると同様に，スピリチュアルケアは必要だと考える．

C.M.パークス⁷⁾は，死別体験は誰の人生にも起きる出来事であるとし，悲嘆を，愛する人を失った後に起こる「心の麻痺」「切望」「混乱と絶望」「回復」の段階を経るプロセスであり，段階は互いに混じり合い，置き換わる臨床像の連続体であるとしている．そうした死別体験の中でも特に，配偶者を亡くすことは，その後の不安や，抑うつといった精神的問題をもたらすこと^{8~9)}，悲嘆症状が複雑で，長期になれば，様相が複雑化していくこと¹⁰⁾が言われている．すなわち配偶者との死別は，悲しみや抑うつなど精神的な感情の部分に大きく揺らぎをもたらす上，目に見えないストレスや悲しみが身体にも影響をもたらし，配偶者との死別が遺されたパートナーの心身の健康に影響を及ぼすことがわかっている．また生田ら¹¹⁾は，有配偶高齢者と比較し，配偶死別高齢者の精神的健康度は顕著に悪いこと，またスピリチュアリティは，その下位因子に差異があり，構造が異なることを明らかにした．よって，配偶者との死別は精神面に大きく影響を与えること，生きる意味や目的といった生きる枠組みや土台の再構築に影響することがわかる．こうした配偶死別高齢者の，生きる意味や目的を支援するスピリチュアルな側面への介入が必要であると考えられる．

スピリチュアルな側面への介入は，対象のスピリチ

スピリチュアリティの状況を把握することから始まる。国内においてスピリチュアリティ尺度は開発され¹²⁾、高齢者のスピリチュアリティについて、文献検討から概念を分析した上で、尺度項目が構成されている¹³⁾。一方、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ概念は8下位概念（スピリチュアルペイン、存在の意味の探求、ひとりで生きる、繋がりの実感、感謝の気持ち、自己を超越したものへの関心、超越した存在への故人の配置、新たな「わたし」意識）で構成されることが示されている¹⁴⁾。また、喪失体験が大きく影響している配偶死別高齢者のスピリチュアリティの様相は、高齢者のそれとは異なっていた。本研究では、死別による配偶者喪失体験後的高齢者を対象とし、スピリチュアリティを捉えるための尺度開発に着手した。

II 本研究の目的

配偶者を亡くした経験をもつ高齢者を対象とする配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度の開発を目指し、その初期段階に位置する研究として、質問項目を作成し、適切な質問項目を選定する。

III 用語の定義

スピリチュアリティ：人間存在の意義に関わり、生きる力を支える根底にある土台である。土台としてのスピリチュアリティは、人間の根源をなすものであり、生まれながらにして人間がスピリチュアルな存在であることを示す。また、生まれながらにして人間がもつスピリチュアリティは、危機的状況において覚醒し、このような状況のなかで『自己』『他者』『超越』の調和のもとより機能を果たすことができる

IV 研究方法

1. 研究対象者

配偶者との死別を経験した65歳以上の高齢者124名

2. 調査期間 平成22年4月～平成23年12月

3. 調査項目

1) 対象者の属性

年齢、性別、死別からの期間、死別の状況（原因）、結婚期間、介護期間、現在の同居家族の有無（同居者の続柄）

2) 本調査で検討する配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度項目

配偶者を亡くした高齢者のスピリチュアリティについて質的に分析を行った先行研究¹⁵⁾から抽出された60のコードを参考に素案を作成した。項目の各々が定義に合致しているか、適切であるかを検討し、調査対

象者の年齢を考慮するための検討を行った。配偶者を亡くした経験をもつ65歳以上の高齢者5名に、意味のわかりにくい言葉や難しい言い回しの有無を確認し、質問項目内に特にわかりにくい言葉はなかったため、そのままの言葉を用いることにした。また、調査の意図が明確になりすぎないように、乱数表を用いてランダムに並び替え、回答する対象者が各々の質問について意味を考えながら回答を行うように配慮した。こうして作成されたものを、配偶死別高齢者スピリチュアリティ仮尺度43項目とした。この仮尺度は、「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」の5段階リッカートスケールとし、得点が高いほど、スピリチュアリティとそれぞれの下位概念の特徴が強いことを示す。配偶死別高齢者スピリチュアリティ仮尺度43項目を表1に示す。

表1 配偶死別高齢者スピリチュアリティ仮尺度43項目

下位尺度	質問項目
スピリチュアルペイン	14. なにもしたくない
	12. 生きがいがない
	27. どこにも行きたくない
	29. 死にたいと考えることがある
存在の意味の探求	10. 夫婦でなくなったと痛感する
	32. 配偶者がいた時のことを思い出し悲しくなる
	4. 支えがいなくなったと感じる
	43. 自分の死について考える
ひとりで生きる	1. 自分の存在とはなにかと考える
	17. 死の意味について考える
	9. 生きるとはどういうことか考える
	23. ひとつひとつのことをこなしていこうと思う
繋がりの実感	11. 同じ境遇の人の支えになろうと思う
	26. 自分にはしなければいけないことがある
	25. これからは生きていこうと思う
	42. ひとりで生きていくことを肯定的に捉える
感謝の気持ち	41. 自分の健康について考える
	15. 目的を見いだしている
	24. 生きがいがある
	19. 家族との繋がりがあがる
自己を超越したものへの関心	20. 友人との繋がりがあがる
	21. 他（19・20）の人との繋がりがあがる
	37. 自分は限りある存在である
	38. 永遠の命を信じる
新たな「わたし」意識	34. 子供や孫に感謝している
	35. 友人に感謝している
	36. 他（34・35以外）の人に感謝している
	3. 自然に対し畏敬の念をもっている
超越した存在への故人の配置	8. 祈る
	13. あの世はどんなところなのだろうか考える
	16. 自分を越えたなにかしらの力があると思う
	31. 縁を感じる
新たな「わたし」意識	33. 拝む
	7. 亡くなった配偶者に守ってもらっていると感じる
	22. 亡くなった配偶者が成仏することを願う
	28. 亡くなった配偶者に守ってくれるようお願いする
新たな「わたし」意識	30. 亡くなった配偶者に語りかける
	2. 一生懸命に配偶者の介護をしたと思う
	5. 今の状況に満足している
	6. 自分には価値があると思う
新たな「わたし」意識	18. 自分は成長したと思う
	40. 自分の人生を振り返る
	39. 今後の人生について考える
	4. 支えがいなくなったと感じる

3) 日本版 WHOQOLSRPB (WHOQOLSRPB 改変 日本版スピリチュアリティ尺度)¹⁶⁾

この尺度は、日本人のスピリチュアリティを測定する尺度として信頼性・妥当性が検証されており、「親切、利己的でないこと」「受容」「信仰」「内的な強さ」「心の平穏、安寧、和」「死と死にいくこと」「人生の意味」「絶対的存在との連帯感」「無償の愛」の9下位概念、39の質問項目から構成されている。回答は、「1:全くない」～「5:非常に(あてはまる)」の5段階のリッカートスケールで求め、得点が高い方がスピリチュアリティの表出が強いことを示す。

4. 分析方法

分析は、統計学パッケージ SPSS19.0 for Windows を用いた。基本統計量の算出、因子分析、Cronbach's αの算出、Pearson の相関係数の算出を行った。

V 倫理的配慮

研究を遂行するにあたり、研究対象者に、研究目的、研究方法、その他研究の概要を文書にて説明した。さらに、個人が特定されることなくプライバシーが保護されること、研究への参加は自由であること、協力できない場合にも何ら不利益を被ることはないことを文書にて記し、研究の同意を求めた上で、研究に協力する場合のみ、調査票に答えてもらった。また文書には、調査票は鍵付きの保管庫に保存され、研究終了後は破棄されること、調査票の回収をもって対象者の研究の同意とすることを明記した。本研究は山口大学大学院医学系研究科保健学専攻医学系研究倫理審査委員会の承認(管理番号 117)を得た。

VI 結果

1. 対象者の背景 (表 2)

表 2 対象者の概要

性別 (人)	男	16 (15.2%)
	女	88 (84.8%)
年齢 (歳)	平均±標準偏差	77.4±5.6
	最小-最大	65-89
	平均±標準偏差	43.1±14.9
結婚期間 (年)	最小-最大	5-64
	平均±標準偏差	98.0±123.8
死別後期間 (か月)	最小-最大	8-675
	平均±標準偏差	97 (93.3%)
死別原因 (人)	疾病	6 (5.7%)
	事故	1
	その他	32 (30.5%)
同居家族の有無(人)	子供	6 (5.7%)
	その他家族との同居	66 (63.8%)
	無(独居)	

n=104

配偶死別高齢者の有効回答数は 104 名 (有効回答率 84%) であった。104 名の対象者の属性は、男性 15 名、女性 89 名、平均年齢 77.4±5.6 歳、平均結婚期間 43.1±14.9 か月、死別後期間 98.0±123.8 か月であった。また、死別原因は、病気が 97 名 (93.3%) で、事故が 6 名 (5.7%)、自殺が 1 名であった。同居家族の有無については、子供との同居が 32 名 (30.8%)、親や兄弟との同居が 6 名 (5.7%)、独居が 66 名 (63.5%) であった。

2. 配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度項目の検討

1) 天井効果及びフロア効果による項目の検討

尺度を構成する 43 項目の分布反応である天井効果およびフロア効果を確認した。各項目の平均得点+標準偏差が 5 以上となる質問番号 2, 19, 22 と、平均得点-標準偏差が 1 以下となる質問番号 4, の 4 項目を削除した。その結果、項目数は 39 項目となった。

2) G-P 分析 (Good-Poor Analysis) による項目の検討

尺度の総得点で、2 群 (上位群, 下位群) に分け、その群ごとの平均値を求め、群間で平均値の差がみられなかったもの、質問番号 5, 13, 14, 17, 32, 43 の 6 項目を削除した。その結果、項目数は 33 項目となった。

3. 因子分析による因子妥当性の検討および因子の解釈・命名

33 項目にて主因子法での因子分析を行い、固有値およびスクリープロットを確認した。これを踏まえ因子数を変えながら主因子法、プロマックス回転にて分析をすすめ、因子数を 5 (累積寄与率 67.4%) とした。因子抽出のプロセスにおいて、5 つの各因子の因子負荷量が 0.41 未満の質問番号 18, 31, 35, 37 を削除した。内容妥当性の検討により因子内での当てはまりが悪い質問番号 10, 12, 27 を削除した。最終的に 26 項目の因子分析にて、安定した 5 因子を抽出し (表 3)、配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度; SAS-EBLS (Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost their Spouse) を開発した (表 4)。

以下、因子の各質問項目から捉えられる意味内容から命名が行われた過程を述べる。第 1 因子は、他者との繋がりの実感から自己を捉え、第三者としての他者に感謝していた。そして自然の偉大さの気づきと環境との繋がりの中での自己の存在の捉え方を求めている姿が表現されていた。また人間が何かにすぎる思いから、自分という人間の有限性について無限のものとの関係性から自己を見出していた。自己、他者、環境

の3者の関係性に、生の意味の本質があると考え、「自己、他者、環境との調和」と命名した。

第2因子は、配偶者喪失体験後自分の健康を願い、亡くなった配偶者に自分や子孫のこと、毎日の出来事を語りかけ、身近な存在としての友人への感謝の気持ちを持ち、夫婦としてではなく、個人としてひとりで

いきていくことへの覚悟が表現されており、「個人として生きていく覚悟」と命名した。

第3因子は、ひとりになった今後の人生を考え、これからの人生を生きていくという肯定的探求の姿が表現され、「生きる意味や目的の探求」と命名した。

表3 配偶死別高齢者スピリチュアリティ仮尺度26項目の因子構造

質問項目	因子負荷量				
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
	自己、他者、 環境との 調和	個人として 生きていく覚悟	生きる意味や 目的の探求	霊的存在とし ての故人の 再配置	自己存在への 問い
SS21 他者との繋がりがあ	0.855	0.074	-0.155	-0.31	-0.074
SS20 友人との繋がりがあ	0.739	-0.092	0.099	-0.342	0.157
SS9 生きることについて考	0.73	-0.145	0.081	0.143	0.147
SS11 同じ境遇の人の支えになろうと思う	0.718	-0.229	-0.132	0.251	0.17
SS8 祈る	0.675	0.09	0.062	0.225	-0.017
SS36 他者に感謝している	0.641	0.344	-0.012	-0.165	0.06
SS1 自分の存在とはなにかを考える	0.618	0.033	0.002	-0.014	0.418
SS3 自然に対して畏敬の念をもっている	0.515	0.209	-0.06	0.047	-0.089
SS38 永遠の命を信じる	0.492	-0.157	-0.174	0.347	-0.228
SS41 自分の健康について考える	0.119	0.823	-0.04	0.047	0.118
SS34 友人に感謝している	-0.11	0.759	-0.011	0.022	0.222
SS42 ひとりで生きていくことを肯定的に捉える	-0.082	0.676	-0.048	-0.269	-0.106
SS33 拝む	0.241	0.659	0.05	0.222	-0.022
SS30 亡くなった配偶者に語りかける	0.2	0.58	-0.299	0.368	-0.104
SS23 ひとつひとつこなしていく	0.487	0.535	0.237	-0.158	-0.099
SS25 これからも生きていく	-0.369	0.512	0.398	0.099	0.3
SS29 死にたいと考えることがある	-0.233	0.016	0.742	0.047	-0.041
SS26 自分にはしなければいけないことがある	0.14	0.162	0.714	0.013	-0.105
SS24 生きがいがある	0.262	0.259	0.572	-0.006	-0.202
SS15 目的を見出している	0.415	-0.34	0.455	0.217	-0.186
SS7 亡くなった配偶者に守ってもらっていると感じる	0.113	-0.245	0.152	0.788	0.026
SS16 自分を越えたなにかしらの力があると思う	-0.083	0.022	-0.117	0.704	0.159
SS28 亡くなった配偶者に守ってくれるようお願いする	-0.209	0.411	0.063	0.571	-0.009
SS39 今後の人生について考える	0.062	0.006	-0.016	-0.001	0.822
SS40 自分の人生を振り返る	0.181	0.083	-0.115	0.067	0.768
SS6 自分には価値があると思う	0.074	0.078	0.082	0.272	0.429
累積寄与率 (%)	29.3	44.0	53.9	61.7	67.4
Cronbach's α 全体	0.898	0.862	0.860	0.799	0.713

n=104, 因子抽出法：主因子法, 回転法：プロマックス回転

表4 配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度 ; SAS-EBLS (Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost their Spouse) 質問項目

質問項目	
自己、他者、環境 との調和	生きる意味や目的の探求
X1 他者との繋がりがあ	X17 死にたいと考えることがある
X2 友人との繋がりがあ	X18 自分には今しなければいけないことがある
X3 生きることについて考	X19 生きがいがある
X4 同じ境遇の人の支えになろうと思	X20 目的を見出している
X5 日々の生活の中で祈	霊的存在としての故人の再配置
X6 他者に感謝している	X21 亡くなった配偶者に守ってもらっていると感じる
X7 自分の存在とはなにかを考	X22 自分を超えたなにかしらの力があると思う
X8 自然に対して畏敬の念をもっている	X23 亡くなった配偶者に守ってくれるようお願いする
X9 子孫に繋がる永遠の命を信じ	自己存在への問い
個人として生きていく覚悟	X24 今後の人生について考
X10 自分の健康について考	X25 今までの自分の人生を振り返
X11 友人に感謝している	X26 自分には価値があると思
X12 ひとりで生きていくことを肯定的に捉	
X13 日々の生活の中で仏壇などに拝	
X14 亡くなった配偶者に語りかけ	
X15 ひとつひとつ日々のことをこなして	
X16 これからも生きていく覚悟ができて	

第4因子は、自分や自分の子供の健康や生活など、自分の大切な何かを守ってくれたり、自らを奮い起こすために亡くなった配偶者に語りかけたりすることによって、自分に言い聞かせていた。自分が生きていくうえで心の拠り所として、夫婦であった配偶者を自分にとっての霊的存在に位置づけており、「霊的存在としての故人の再配置」と命名した。

第5因子は、自分の人生はどんな人生であったのか、反省を含めて振り返り、今後の人生について、自分はようになっていくのかと考、自分は価値のある人間であるのかと実存的な問いにある姿であり、「自己存在

への問い」と命名した。

4. 下位尺度得点間の相関 (表5)

SAS-EBLS の項目の得点を合計した下位尺度得点間の相関を求めると (Pearson の相関係数)、「自己、他者、環境との調和」と「霊的存在としての故人の再配置」「自己の存在への問い」、「生きる意味や目的の探求」と「霊的存在としての故人の再配置」「自己の存在への問い」以外の下位尺度得点間に有意な正の相関 ($r=0.20\sim0.52, p<0.01\sim0.05$) が示された。

表5 SAS-EBLS 下位尺度得点間の相関

	n=104						
	自己、他者、 環境との調和	個人として 生きていく 覚悟	生きる意味と 目的の探求	霊的存在としての 故人の再配置	自己存在 への問い		
自己、他者、 環境との調和	1	0.407 **	0.520 **	0.157	0.179		
個人として 生きていく 覚悟	0.407 **	1	0.425 **	0.354 **	0.375 **		
生きる意味や 目的の探求	0.520 **	0.425 **	1	0.088	0.045		
霊的存在とし ての故人の 再配置	0.157	0.354 **	0.088	1	0.204 *		
自己存在 への問い	0.179	0.375	0.045	0.204 *	1		

相関係数 : Pearson's r

**p<0.01 *p<0.05

5. 内的一貫性による信頼性の検討 (表3)

SAS-EBLS の因子分析により、Cronbach's α を算出したところ (n=104)、全体では 0.898、すべての下位尺度において、 $\alpha=0.711\sim0.862$ の中～高い内的一貫性による信頼性が確認された。

6. 構成概念妥当性の検討 (表6)

SAS-EBLS の下位尺度得点と、日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度「親切、利己的でないこと」「受容」「信仰」「内的な強さ」「心の平穏、安寧、和」「死と死にいくこと」「人生の意味」「絶対的存在との連帯感」「無償の愛」の各項目の得点との相関 (Pearson の相関係数) を求めた。

表6 SAS-EBLS の下位尺度得点と、日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度得点の相関

n=104

	自己、他者、環境との調和		個人として生きていく覚悟		生きる意味や目的の探求		霊的存在としての故人の再配置		自己存在への問い	
親切、利己的で ないこと	0.405	**	0.348	**	0.465	**	0.261	**	-0.007	
受容	0.419	**	0.245	*	0.235	*	0.074		-0.168	
信仰	0.503	**	0.275	**	0.184		0.434	**	-0.039	
内的な強さ	0.403	**	0.118		0.278	**	0.072		-0.100	
心の平穏、安寧、和	0.381	**	-0.022		0.255	**	0.001		-0.093	
死と死にいくこと	0.113		0.021		-0.225	*	0.084		0.190	
人生の意味	0.430	**	0.286	**	0.332	**	0.425	**	0.014	
絶対的存在 との連帯感	0.175		0.177		-0.016		0.345	**	-0.217	*
無償の愛	0.210	*	0.062		0.032		0.325	**	-0.134	

相関係数 : Pearson's r

** p<0.01 *<0.05

SAS-EBLS の下位尺度「自己、他者、環境との調和」得点と日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度「親切、利己的でないこと」「受容」「信仰」「内的な強さ」「心の平穏、安寧、和」「人生の意味」「無償の愛」の得点、SAS-EBLS の下位尺度「個人として生きていく覚悟」の得点と日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度「親切、利己的でないこと」「受容」「信仰」「人生の意味」の得点、SAS-EBLS の下位尺度「生きる意味と目的の探求」と日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度「親切、利己的でないこと」「受容」「内的な強さ」「心の平穏、安寧、和」「人生の意味」の得点、SAS-EBLS の下位尺度「霊的存在としての故人の再配置」の得点と日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度「親切、利己的でないこと」「信仰」「人生の意味」「絶対的存在との連帯感」「無償の愛」の得点間について、有意な正の相関 ($r=0.21\sim0.50$, $p<0.01\sim0.05$) が示された。SAS-EBLS 下位尺度「生きる意味と目的の探求」の得点と日本版 WHOQOLSRPB の「死と死にいくこと」の得点間について、有意な負の相関 ($r=-0.225$, $p<0.05$) が示され、SAS-EBLS の構成概念妥当性を確認できた。

VII 考察

1. 尺度の信頼性

本研究においては、尺度の信頼性を内的一貫性による信頼性で検討した。全体で 0.898、すべての下位尺度において、 $\alpha=0.711\sim0.862$ の中～高い内的一貫性による信頼性が確認された。よって信頼性が確保できたと考える。

2. 尺度の妥当性

SAS-EBLS の下位尺度と、日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度「親切、利己的でないこと」「受容」「信仰」「内的な強さ」「心の平穏、安寧、和」「死と死にいくこと」「人生の意味」「絶対的存在との連帯感」「無償の愛」との相関が認められた。

3. SAS-EBLS 開発の意義

1) 「個人」として生きていく覚悟

SAS-EBLS の 1 つ目の側面は、配偶死別という経験をすることによって、個人としての「わたし」意識が芽生え、生きていく覚悟をすることである。

日本においては、日常生活の中でスピリチュアリティが問われることは少ない。スピリチュアリティは、

日常の中に潜行しているといえるが、伝統的理解からいえば¹⁷⁾、人間は生まれながらにしてスピリチュアルな存在である。すなわち、スピリチュアリティは、人間が生まれながらにもつものではあるが、独自の文化に規定されるといった文化的要因が大きいといえる。そしてスピリチュアリティは日常生活の中では潜在しているが、危機的状況を経験した時に人生の意味や目的の喪失に対する充足として、自己存在の意味を問うなかで発動し、覚醒すると考える。

愛する人の死は、人生のなかでおこる個人の危機的状況である¹⁸⁾。死別後遺族は、悲しみという感情や抑うつなどのプロセスを経て、悲嘆回復をたどる。しかし感情の表出がうまくいかない場合や、その後の社会的サポート、感情的サポートの不足などから孤独感や孤立に陥ることもある。そうすると身体的な健康が悪くなり、精神的健康も保てない。少子高齢化の現在、家族形態の縮小化や家族機能の変化という社会的状況で、高齢期の人々の家族形態が高齢者単独世帯にあることも少なくない。もともと高齢者単独世帯であった人々のうち、配偶者が亡くなることは、独居高齢者を生み出すことにもなる。

SAS-EBLS の下位尺度得点間の相関結果から、下位尺度「個人として生きていく覚悟」は、どの下位尺度とも有意に強い相関があった。「個人として生きていく覚悟」は、その他の下位尺度「自己、他者、環境との調和」「生きる意味や目的の探求」「霊的存在としての故人の再配置」「自己存在への問い」の中心に位置づけられる。すなわち、配偶死別高齢者が個人として生きていく覚悟をするためには、その他4つの下位尺度が促進されるような、個人としての態度をもつことが必要と考える。自己、他者、環境との調和においても、自己の価値観を増大させるように、他者、環境すべてのものに、感謝の気持ちを持つといった無償の愛をそそぐことができるようになることが重要なのである。その中で、亡くなった配偶者を、自分にとっての超越した存在に配置し、これからの自分が生きていくための拠り所としていくことが必要となる。再配置された故人に語りかけたり、守ってもらうように頼んだり、祈る、拝むなどの宗教儀礼の形をとることで、自分の生き方をひとつひとつ確認しながら、自己存在について問い、新たな特性をもつ「個人」として生きていく覚悟をしていくのである。

2) 超越的存在となった故人

SAS-EBLS の下位尺度得点と日本版 WHOQOLSRPB の下位尺度得点との相関から検討した結果より、SAS-EBLS 下位尺度「生きる意味と目的の探求」と日本版 WHOQOLSRPB の「死と死にいくこと」との負の相関が示された。日本版

WHOQOLSRPB の「死と死にいくこと」が、自分の死に方や死への恐怖について問うているためであると考へ、配偶者を亡くした経験をした高齢者にとっては、個人として生きていくことや生きがいなどが、肯定的な感情として表出される。すなわち死については、配偶者という最も身近な家族の死を経験することで、死への恐怖や自らの死についての思いが弱まっているのではないかと考へる。

VIII 結論

SAS-EBLS は、「自己、他者、環境との調和」「個人として生きていく覚悟」「生きる意味や目的の探求」「霊的存在としての故人の再配置」「自己存在への問い」の5下位尺度、26項目で構成された。また SAS-EBLS は、下位尺度の内的一貫性による信頼性が確認された。さらに、日本版 WHOQOLSRPB との比較による構成概念妥当性が確認された。すなわち、SAS-EBLS は、日本における死別による配偶者喪失体験の高齢遺族のスピリチュアリティを定量的に評価することが可能な信頼性と妥当性が確認された尺度である。

IX 研究の限界と今後の課題

本研究において、「配偶者喪失体験」という危機的状況を付加した尺度である SAS-EBLS を開発することができ、ここに本研究の独創性があり、社会に与える貢献と意義がある。今後も発達段階や状況を絞り込んだうえで、スピリチュアリティについて、対象の現象を分節化し、特徴を検討した研究を蓄積することが必要である。

謝辞

本研究はJSPS科研費22592588（配偶者を亡くした高齢遺族のスピリチュアリティへの回想法の効果に関する研究）の助成を受けた。

注1) 用語の定義参照のこと

引用文献

- 1) 厚生労働統計協会 (2015) : 国民衛生の動向 2015/2016, 62 (9), 51-85.
- 2) E.H.エリクソン, J.M.エリクソン, H.Q.キヴニック (1997) : 老年期 生き生きとしたかかわりあい, 57-59, みず書房, 東京.
- 3) 窪寺俊之 (2004) : スピリチュアルケア学序説, 2, 三輪書店, 東京.
- 4) 白田寛, 玉城英彦, 河野公一 (2004) : WHO の健康定義制定過程と健康概念の変遷について, 日本公衆衛生雑誌, 第51巻 第10号, 884-889.

- 5) 石井八重子 (2005) : World Health Organization (WHO) を中心とした健康関連に関する Quality of Life (QOL)・スピリチュアリティ研究活動の概観, 東京医療保険大学紀要, 第1号, 45-55.
- 6) 青木邦男 (2001) : 在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因—地方都市の調査研究から—, 社会福祉学, 125-136.
- 7) C.M.パークス/桑原治雄, 三野善央訳 (2002) : 死別遺された人たちを支えるために, 162-180, メディカ出版, 大阪.
- 8) 坂口幸弘, 柏木哲夫, 恒藤暁他 (2000) : 配偶者喪失後の時間経過と精神的問題との関連, ターミナルケア, 10(1), 71-75.
- 9) Mark DS, Earle H, Lauren CV, et al (2008) : Psychiatric illness in the next of kin of parents who die in the intensive care unit, Critical Care Medicine, 36, 1772-28.
- 10) Horowitz MJ, Siegel B, Holen A, et al (1997) : Diagnostic criteria for Complicated Grief Disorder, The American Journal of Psychiatry, 154, 904-910.
- 11) 生田奈美可, 田中マキ子 (2012) : 配偶死別高齢者の精神的健康の諸相—有配偶高齢者との比較から—, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 5(1), 1-10.
- 12) 比嘉勇人 (2002) : Spirituality 評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討, 日本看護学会誌, 22(3), 29-38.
- 13) 竹田恵子, 太湯好子, 桐野匡史他 (2007) : 高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発 妥当性と信頼性の検証. 日本保健科学学会誌, 10(2), 63-72.
- 14) 生田奈美可 (2011) : 配偶者を亡くした高齢遺族のスピリチュアリティに関する質的研究, 日本看護研究学会雑誌, 34(2), 97-107.
- 15) 前掲論文 14) .
- 16) 田崎美弥子, 松田正巳他 (2001) : スピリチュアリティに関する質的調査の試み—健康およびQOL概念のからみの中で—, 日本医事新報, 4036, 24-32.
- 17) 山本美津子, 渡辺俊彦 (2003) : 「スピリチュアル」の伝統的理解と医療界におけるとらえ方, 聖母女子短期大学紀要, 16号, 37-44.
- 18) 前掲著書 7) 162-180.